

平成 21 年 12 月 8 日

## 卓話 「中国短期留学と、はじめての一人旅」

卓話者 松野 秀計

1985 年 7 月、当時 17 歳（高校 3 年生）の夏の出来事です。

今から 24 年前、1985 年といえばこんな出来事がありました。

- 1 月…第 55 代横綱・北の湖が引退
- 2 月…田中角栄が脳梗塞で倒れ入院
- 3 月…つくば博覧会開催
- 4 月…電電公社が NTT に、たばこ産業が JT に民営化
- 6 月…豊田商事の会長がマスコミが集まる中、マンション内で刺殺される
- 8 月…日本航空 123 便が御巣鷹山に墜落
- 9 月…ロス疑惑の三浦和義が逮捕
- 10 月…阪神が 21 年ぶりに優勝
- 11 月…レーガン大統領とゴルバチョフ書記長が初会談
- 12 月…第 2 次中曽根内閣発足

1985 年 5 月、小学校の 5 年生から始めた柔道の総決算、インターハイの県予選の決勝戦。延長の末、僅差で判定負けをし、自分の柔道に幕を下ろした。

6 月、朝日新聞に中国留学についての記事が載っていた。

母親との冗談まじりの会話で、「どうせぶらぶらしてるのなら、中国でも行ってみたら？」との一言から私の放浪の旅が始まった。

1985 年 7 月 26 日～ 9 月 7 日までの 44 日間

<行程>

大阪 ～ 上海経由 ～ 北京 ～ 北京語言学院（短期留学） ～ 西安 ～ 岳陽 ～ 長沙  
～ 上海 ～ 大阪

当時の中国はこんな感じでした。

1972年9月、日本と中国の国交が正常化となり、1977年には四人組が逮捕され文化大革命が終結しました。国交が正常化したといっても、まだまだ個人旅行では入国できない国でした。

1979年から、政府レベルの訪中団のほかに民間のツアーで旅行をすることが可能になりましたが、団体行動のみで、事前に決められた所しか行けず、泊まる宿も中国側から指定され、どこへ行くにも監視付きという不自由な状態でした。

1983年から個人旅行が可能になりました。1983年に解放された都市（外国人が個人で行くことが出来る都市は31カ所。1985年には一気に98カ所まで解放され、チベットをのぞく全ての省に入れるようになりました。

現在の中国とはまったく雰囲気異なる「共産主義国」を体感することが出来ました。

当時、日本と中国との生活レベルや環境、衛生面、すべての面ですごいギャップを痛感させられました。戦後を知らない世代ですが、きっと戦後の日本はこんな感じだったのだろうな、と思わせるような状況でした。

普通に街で買い物をしていると、現地の人から物珍しさで、じろじろと見られたり、友人が天安門広場でマニキュアを塗っていたら、周りは何十人もの黒山の人ばかりで囲まれ、ちょっと怖い感覚になることも多々ありました。当時は外国人が珍しいせいか、一般の人に話し掛けようとすると、怖がられ、走って逃げられることが多々あり、学校の先生に質問してみると、外国人と接触するだけで公安（警察）から取り調べを受けることがあるからだそうです。

お金は当時、人民元と兌換券のダブルの紙幣が使用され、兌換券でないと友誼商店（当時は唯一外国製品が売っている国営商店）で売られている外国製品を購入することができないため、兌換券をほしがる人々によく出会いました。また、闇の両替が（違反）あり、街中で外国人を見ると「兌換券と換えよう」と声をかけてくる人達がいきました。当時のレートは100元（1000円）→120～130元のレートでした。

ホテルは当時、外国人の宿泊可能なホテルが決まっていて、中国人のみ可の宿、華僑と中国人のみ可の宿、外国人だけ可の宿の3種類がありました。

26日 大阪空港から初めて一人で飛行機に乗り込む。添乗員や同行者はなく、上海乗り換え北京行きのチケットを手渡され、一路北京へ。北京の空港に「放さんが迎えに行きます」と書かれた空港の地図と簡単な中国語が書かれた用紙を片手に握りしめ出国審査へとむかった。好奇心や期待よりも無事北京までたどり着けるのだろうかという不安と緊張で押しつぶされそうになる。

上海に到着。隣に座っていた日本人観光客のおばちゃんも上海での入国であったため、日本人らしき人を見ては声をかけ、北京まで行くのかを聞いてまわった。無事北京行きの出発ロビーまでたどり着き再出発の時間を待っていた。出発予定の時間が来たのに一向にゲートが開かない。周りがざわつきだし、何人かがクルーに質問をしているが、首を横に振っているだけで何の説明もない。1時間ほど経ち拡声器を持った人が何やら大声で叫んでいる。どうやら北京が猛烈な雷雨のため飛行機が飛ばず天候回復を待っているようだ。その2時間後、何もアナウンスが無く時間が過ぎる。周りの苛立ちが諦めに変わってきたころ、ようやくアナウンスが入り大歓声となった。北京に到着したのは深夜1時を回っていた。半分諦めながらも出国ロビーに出るとそこには満面の笑顔で手を振っている「放さん」が立っていた。

28日 市内を散策。町中の所々に小さな自由市場が点在している。鄧小平の改革開放路線により、ここ2年ほど前から米以外の食料品は自由に販売が可能になった。通路の両脇にはところ狭しと店を出しいろいろな食材が並んでいる。周りは荷馬車に山ほど積まれた瓜、自転車の両サイドに十数匹も縛り付けられたアヒル、籐の籠に入ったウサギ、手製で作られ年季の入った天秤棒で量をはかり、まるで喧嘩をしているかのような物言いで交渉している。バス停では順番なんて関係なく、我先にと乗り込み喧嘩をしているトロリーバス。見るものすべてにカルチャーショックを覚える。

30日 バスを乗り継ぎ2時間ほどかけて北京の中心地「王府井」へ出かける。中国の銀座とよばれるところのため町中、黒山の人だかりで歩くこともままならない。トイレに行きたくなり中心地にある百貨大楼のトイレに……。すごいすごいと噂では聞いていたがそこには目を疑うようなトイレがあった。